

2型糖尿病とともにある人の連続性に着目した 看護実践モデルの開発

河 井 伸 子 (大阪大学大学院医学系研究科)

本研究は、2型糖尿病とともにある人の連続性に着目した看護実践モデルを開発することである。看護実践モデルの開発は、①仮説モデルの考案②考案した仮説モデルの実践適用による検討の2段階で行われた。本稿では2段階目である仮説モデルの実践適用による検討について報告する。

対象者は2型糖尿病と診断され専門外来診療を受け、連続性の感覚の縮小が認められる人3名とし、10ヶ月間、研究者自身が仮説モデルを適用した看護実践を行った記録を質的帰納的に分析し、モデルの実践適用性について検討した。

その結果、本看護実践モデルを適用することにより、対象者自身が過去から未来につながる連続性を自覚したり将来への見通しが立つなど連続性の維持・拡張が見られたこと、自分の生活として主体的に生活調整していくことを促進することが示され、有用性が確認された。また、本看護実践の要となる【本人の思い・考え・望みを問いかけ明確化する支援】は、『応答・共有』として、新たにモデルに位置づけるなどのモデルの修正を行った。開発した連続性に着目した看護実践モデルは、2型糖尿病とともにある人の自分らしさを維持した生活調整を促進することに寄与することが示唆されるとともに、看護実践の場でどのようにそれを見いだし判断しながらその人に合わせて支援を展開していけばいいのかを提示したことは、看護者が実践を行う際の手引きとなると考える。

KEY WORDS : Type 2 Diabetes, Continuity, Nursing Practice Model

I. はじめに

2型糖尿病の生活調整は、食事・活動といった自己の生活史、価値・信念、人との関係性など様々な事柄と関係した生活習慣の変化を求められる。その体験は、アイデンティティに関わる生活史に影響を与え、その人は生活史上の途絶を経験し、自己概念の再考と再安定化を図り、自己を維持する生活調整を迫られる^{1), 2)}。そのため、生活調整の支援は、単に疾患のコントロールを中心とした行動変容への支援にとどまらず、自己を維持するという観点が含まれた2型糖尿病とともに生きるものの調整への支援が必要とされている。病いによる生活の変化に適応したり生活の質を維持するために連続性が重要であることは、様々な文献で指摘されており^{3), 4), 5)}、2型糖尿病とともに生きる人においても変化の中で安定感をもたらしたり、自己にあった生活調整を考えたり、自分らしさを維持するものであることが明らかとなっている⁶⁾。加えて、連続性は途絶の感覚を生じずに生活調整していくうえで重要なものであるが、それと同時に途絶の感覚を持たないがゆえに、2型糖尿病とともにある

人自身に意識化されず、見出されにくく、ケアのときにも看護師にも注目されづらいという特徴を持つことも明らかとなった⁶⁾。よって、連続性を実践で用いることができるよう概念化し、それに関係する看護援助を明らかにする看護実践モデルとして開発することで、2型糖尿病とともにある人の捉え難い連続性を維持しつつ、自分らしい生活調整が出来るよう支援することの指針を提供できると考えた。

II. 研究目的

本研究の目的は、2型糖尿病とともにある人の連続性に着目した看護実践モデルを開発することである。

III. 研究デザイン

本研究は2型糖尿病とともにある人の連続性に着目した看護実践モデルを開発する研究の一部である。本研究では、連続性の概念探求を元に考案された連続性に着目した看護実践の仮説モデルに基づき研究者自身が看護実践を行い、その実践を分析し、看護実践内容と対象者の反応から実践適用性を検討した。

IV. 用語の定義

「連続性」とは、生活調整という変化の中で、個人の意味の中に見出される過去－現在－未来のつながりである。連続性を感覚することは、病いによる変化の中で、病い以前の自己と現在の自己、将来の自己を統合することができ、QOLに影響をもたらす。

V. 看護実践の仮説モデル

本研究における看護実践の仮説モデルを図1に示す。連続性に着目した看護実践では、生活調整によって生じる連続性の動態、その動態によって生じる連続性の感覚の変化をアセスメント・評価しながら生活調整への支援を行う。本モデルの援助指針は、2型糖尿病とともにある人が、将来の自己や生活を病い以前の自己や生活とのつながりを持つものとして感覚し（連続性の感覚）、その人にとっての良い方向に向かうような生活調整を試行錯誤しながら行うことができるよう支援することである。

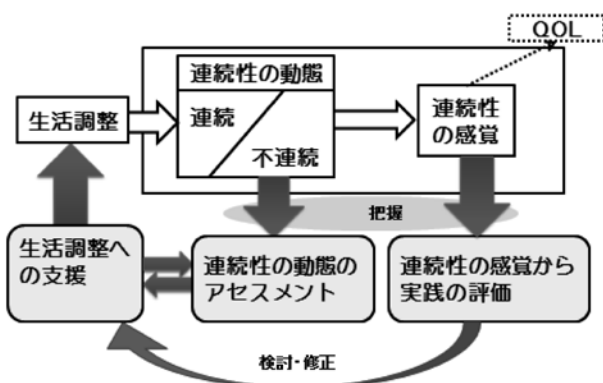


図1 2型糖尿病とともにある人の連続性に着目した看護実践の仮説モデル

VI. 研究方法

1. 研究対象者

2型糖尿病と診断され、外来通院中で、下記の基準に当てはまると自ら思っている人

- ①糖尿病のために自分が望む生活を送れない、あるいは送れないだろうと感じている
- ②糖尿病を持ちつつ生活することで自分らしさが失われたあるいは失われてしまうだろうと感じている
- ③糖尿病のために、将来がどうなるかわからない、先が見えなくて不安に感じている

2. 対象施設

糖尿病の専門外来診療を行なっているクリニック

3. データ収集期間

2007年10月～2008年5月

4. 看護援助方法

仮説モデルに基づいて援助を行った。対象者の外来受診の前あるいは後に30分～1時間の時間を設け援助を行った。

5. データ収集

①患者基本情報

患者の診療録より、診断名、既往歴、現病歴、治療方針、血液検査結果、身体状況、家族構成、年齢、性別、職業、経済状況などの情報を収集した。

②援助経過記録

援助終了後、速やかに援助場面を想起し、援助場面ごとの、状況、看護者の関わり、対象者の反応、看護者が抱いた思い、看護者の対象者の捉え方をメモした。また、対象者の許可を得て、援助場面をICレコーダーに録音し、場面を正確に想起するための補助とした。また、1日を振り返って考えた援助内容や援助の方向性の修正、次回の援助計画の立案を記載した。

6. 倫理的配慮

本研究は、千葉大学看護学部倫理審査委員会の承認を得て実施した。研究依頼施設の責任者に研究計画書を元に口頭で研究目的・内容を説明し施設からの承諾を得た後、対象者に研究の趣旨・方法、自由意志と匿名性の保障、研究参加による利益・不利益、プライバシーの保護について説明し同意書への署名により同意を得た。また、看護実践に当たっては、身体的心理的变化に注意を払いながら行い、援助計画・援助の方向性についてはデータ収集施設の医療スタッフと相談しながら行い、援助の妥当性を確保した。

7. 分析方法

1) 看護実践内容

分析1：生活調整への支援内容

援助経過記録から、研究者が対象者に行った生活調整への支援内容を抽出し、質的帰納的に分析し、カテゴリー化した。

分析2：連続性の動態のアセスメント内容

援助経過記録から、実践において行ったアセスメントの内、連続性の動態を把握するために行ったものを抽出し、質的帰納的に分析し、カテゴリー化した。

分析3：連続性の感覚からの実践の評価内容

援助経過記録から、研究者が連続性の感覚から実践を評価している部分を抽出し、質的帰納的に分析し、カテゴリー化した。

2) 対象者の反応

対象者がどのように反応していたかを構造化して全体把握するために、援助場面での対象者の言動や行動を抽

出し、ラベルを作成した。作成したラベルを、「対象者の反応はどのようなものか」をテーマに質的統合法を用いて各対象者の個別分析を行った。個別分析の最終ラベルを用いて統合分析した。

データの真実性の確保のため、分析に当たっては糖尿病看護を専門とする教員にスーパーバイズを受けた。

Ⅶ. 結 果

1. 対象者の概要

対象者の概要は表1に示す。

表1 対象者の概要

	事例A	事例B	事例C
性別	女性	女性	女性
年齢	60代前半	60代前半	50代後半
罹病期間	5年	18年	4年
治療内容	食事・運動療法のみ 研究期間中に内服治療開始	インスリン	内服治療
合併症	無し	無し	無し
看護実践回数	12回	7回	13回
選定方法	チラシ	医師・看護師より紹介	チラシ
連続性の感覚の縮小	自分の望む生活が送れないと感じている	自分の望む生活が送れないと感じている	自分らしさが失われてしまうと感じている
看護実践開始時のHbA1c	6.0%	9.7%	7.0%

2. 生活調整への支援内容

生活調整への支援内容は、以下の4つのカテゴリーに分類された(表2)。カテゴリーは[[]]で、サブカテゴリーは[]で示す。

[[現状の把握を促す支援]]

これは、対象者の現状把握が促進されるよう、対象者が、生活やその変化を振り返ったり、身体状態が捉えられるよう説明したりする支援であった。

[[本人の望む方向に向かった生活調整がされるための支援]]

これは、対象者の望みを明確化し、それが継続できるような調整方法を提示したり、望む方向に向かっているかの視点から評価する支援であった。

[[自身の力を用いて生活調整することを促進する支援]]

これは、対象者が自分自身で試行錯誤しながら生活調整ができるよう、対象者が行っていることを奨励したり、医療者の考える調整方法の意図などを伝えることなどの支援であった。

[[本人の思い・考え・望みを問いかけ明確化する支援]]

これは、生活する中で生じる感情や感覚を問いかけ明確にすることや、対象者の望みや関心を問いかけ明確化する支援であった。

表2 生活調整への支援内容

カテゴリー	サブカテゴリー
現状の把握を促す支援	対象者が行っている調整方法やそのときの状況を具体的に問い、状況との関連で把握できるように関わる
	対象者が話す過去の状況や身近な人との比較を通して、対象者自身の現状を把握できるように関わる
	コントロール状況を数値などを用いて伝え、それを元に客観的に生活を振り返ることを促す
	対象者が身体で起こっていることが把握できるよう説明をしたり、身体状態の変化を捉えることを促す
	今までの振り返りを促し、現在の行動や思いにつながる過去の体験について問いかける
	運動や食事の習慣について子供時代や節目となっている時代からの変遷を問う
	本人の望む方向に向かった生活調整がされるための支援
自身の力を用いて生活調整することを促進する支援	対象者の関心事を重視し、目指す方向に沿うような調整方法を提示する
	対象者が行っていることが本人の望む方向に進んでいるのかを問いかけ、評価する
	今の生活調整への希望と以前の希望との違いを明確化できるように関わる
	対象者が続けている趣味の経緯やその中で目標を問いかける
	対象者が続けて行きたいと思っている事柄について問いかけ、継続できるように関わる
	対象者の看護実践に対する希望を具体的に明確にするよう促す
	目標を目指す理由や行動を起こす理由について問いかける
	対象者が自分で考え、工夫し、実践していることを奨励しながら、よりよい方法提案する
	対象者が自身で試行錯誤しながら調整できるよう、失敗を次に生かせるように支援する
	対象者が取り組みやすい方法を提案したり、ともに考える
	対象者が調整できているかどうかを判断するために用いている基準を活用し評価することを提案する
	対象者が考える調整についての問題点を明確化する
	対象者が自身で考え選択できるよう医療者が勧める治療・調整方法を意図・利点・欠点を含めて伝える
	対象者とは異なる調整のあり方についての研究者の意見を伝える
問いかけ明確化する支援	対象者のベースや方法など、できる範囲で取り組むことを奨励する
	語られた今までの体験の中で発揮された乗り越える力について問いかけ伝える
	生活調整をやっていく自信について問いかける
	本人の思い・考え・望みを
	対象者の望みを問いかけ明確化する
	対象者の好み・関心・満足感を優先して問いかけ、明確化することを促す
	生活の中で生じる感覚を問いかけ、状況と合わせて明確化することを促す
本人の思い・考え・望みを	自己の身体や生活のあり方についてのイメージを問う
	将来の姿や生活調整のあり方をイメージすることを促し、それについての思いを問いかける
	生活調整や治療・糖尿病についての思いを問いかけ明確化できるように関わる

3. 連続性の動態のアセスメント内容

連続性のアセスメント内容は、以下の5つのカテゴリーに分類された（表3）。カテゴリーは {} {} で、サブカテゴリーは {} {} で示す。

{{生活調整の生活への根付き方}}

これは、生活調整や生活の中で起こった変化が対象者の生活の中にどのように根付いているのかをアセスメントしているものであった。

{{対象者の持つ将来イメージ}}

これは、対象者が将来についてどうイメージしているのかをアセスメントしているものであった。

{{対象者の現状の捉え方}}

これは、現状をどのように捉えているかをアセスメントしているものであった。

{{対象者の望むあり方}}

これは対象者がどんなあり方を望んでいるかをアセスメントしたものであった。

{{今の対象者の根底に流れる過去からのつながり}}

これは、今の状況の中に見られる過去と現在のつながりをアセスメントしているものであった。

4. 連続性の感覚からの評価内容

連続性の感覚からの実践の評価内容は以下の7つのカテゴリーに分類された（表4）。カテゴリーは [[]], サブカテゴリーは [] で示す。

[[先の見通しが立っているか]]

これは、対象者が先の見通しが立っているかどうか評価したものであった。

[[望むあり方に向かっていると感じているか]]

これは、対象者が望むあり方に向かっていると感じているかどうか評価したものであった。

[[満足感や楽しい感覚が維持できているかどうか]]

これは、対象者が満足感や楽しい感覚が維持できているかどうか評価したものであった。

[[自分の取り組んでいることへの手ごたえを感じているか]]

これは、対象者が手ごたえを感じているかどうか評価したものであった。

[[ペースが守られているか]]

これは、対象者のペースで行えているかどうか評価したものであった。

[[欲求が満たされているか]]

これは、対象者が持つ欲求が満たされているかどうか評価したものであった。

[[後悔の念が強いのか]]

これは、対象者の後悔の念が強いかどうか評価したものであった。

表3 連続性の動態のアセスメント内容

カテゴリー	サブカテゴリー
生活調整の生活への根付き方	{過去に行っていた調整状況との変化}
	{対象者が考えている調整がうまくいかない原因}
	{対象者が述べる生活の変化と調整との関係}
	{調整の方法とそれによって高まった欲求との関係}
	{対象者が同時に語る対になった2つの反する思いの関係}
	{対象者が変化したと感じている事柄とそれへの思い}
	{対象者にとっての変化や調整の位置づけ}
	{対象者の話しぶりや表情、身体状態から推測した調整の度合い}
	{調整方法の受け入れ度合いと生活の中に根付いている度合い}
	{調整に取り組む姿勢とその変化}
	{調整に対するイメージ}
	{調整に対する思いに影響を与える出来事と思いの変化}
	{調整に対する思いとその変化}
	{調整へ向かう思いをもたらしきっかけ}
	{調整をする中で経験している感情とその変化}
	{糖尿病になったことによって起こった生活の変化の度合い}
	{糖尿病以外の理由で起こった生活の変化の度合い}
	{無理なく調整が行えるペース}
将来イメージを持つ対象者の持つ	{現状が影響する今後起こりうることのイメージ}
	{家族との関係からみた将来のイメージ}
	{対象者がイメージする将来の生活と将来像}
	{対象者が持つ今後の経過や今後起こりうることのイメージ}
	{対象者が抱く将来の身体状態の予測}
	{対象者の将来の見通し}
現状の捉え方対象者の	{治療に対する捉え方とそれに影響を与えているもの}
	{現状の調整状況についての捉え方}
	{変化に対する捉え方}
	{対象者がコントロールの良し悪しを判断している基準}
	{対象者が考えている糖尿病の原因の意味づけ}
	{対象者が捉える自己の身体の特徴}
	{対象者の糖尿病とともにある生活のイメージとその変化}
	{糖尿病に対する捉え方に影響を及ぼすもの}
	{本人が楽しみを感じる事柄}
対象者の望むあり方	{現在の興味・関心事}
	{仕事や趣味などの本人の関心事と目標や生きる上での位置づけ}
	{治療への考えに影響を与えている事柄}
	{対象者がいいと考える今後の生活のあり方}
	{対象者が目標として置いている像}
	{対象者のコントロール目標とその変化}
	{対象者の過去から続く望むあり方}
	{対象者の調整における興味関心}
	{調整をしていく中で発見される対象者の望むあり方}
	{望むあるいは望まない将来像や生活のあり方}
	{対象者が元々持っている嗜好}
今の対象者の根底に流れる過去からのつながり	{過去から続く性格への捉え方の変化}
	{過去の生活体験の中に見られる対象者の問題に向かう上での強み}
	{過去の体験と現状の思いのつながり}
	{現状の過去の捉え方への影響}
	{現状の思いや今の生活の捉え方に影響する過去の体験}
	{対象者が語る今の調整に影響する過去から続く習慣}
	{対象者の過去から続く望むあり方}
	{対象者の行動の源にある過去の体験からつながる思い}
	{糖尿病とともにある生活の意味づけと過去の体験とのつながり}

表4 連続性の感覚からの実践の評価内容

カテゴリー	サブカテゴリー
先の見通しが立っているか	[将来に目を向けていくことを重視している]
	[コントロール悪化への不安が軽減している]
	[将来が閉ざされる感覚を防いでいる]
	[将来への不安が軽減している]
	[症状が重くなることへの恐怖を軽減している]
	[先の見通しが立たないことの不安を軽減している]
	[先の見通しが立つことを重視している]
望むあり方に向かっていると感じているか	[望むあり方を維持し、それで先を見通すことを重視している]
	[望む調整のあり方を維持している]
	[過去の体験からもたらされた目標への志向を重視している]
	[今に残る過去の体験から続く辛さがやわらぐ・解消している]
	[自分が望む生活が送れていない感覚を軽減している]
	[自分に合った調整・生活になっているという感覚を維持している]
	[得意なものへの思いを強化している]
	[本人が納得することを優先している]
	[本人の目標への志向を重視・維持している]
満足感や楽しい感覚が維持できているか	[本人が興味を持てることを重視している]
	[以前からの楽しみを継続することを重視している]
	[楽しみの感覚を強化している]
	[楽しむことを維持している]
	[満足感を維持している]
自分が取り組んでいることへの手ごたえを感じているか	[不全感や諦めの気持ちを軽減している]
	[コントロールしている感覚を維持している]
	[やっていることへの手ごたえを維持している]
	[自己の身体イメージを保っているという感覚を維持している]
	[取り組んでいることへの自信を維持している]
	[身体を維持し良くすることへの興味を維持・強化している]
	[得意である感覚を維持している]
	[本人のやっつけけるという感覚を維持している]
	[無力感を軽減・防止している]
守られてるか	[積極性を維持している]
	[本人が安心して取り組めるペースを維持している]
	[余裕の感覚を維持している]
満たされているか	[欲求を満たすことを重視している]
	[興味を重視している]
	[好きなものであるという感覚を維持している]
後悔の念が強いのか	[後悔の気持ちを軽減し増幅することを防止できている]
	[やったことへのむなしさを軽減している]

5. 対象者の反応

対象者の個別分析結果で得られた20枚のラベル（A氏最終ラベル6枚、B氏最終ラベル7枚、C氏最終ラベル7枚）を用い、3段階のラベル編成を経て、以下の6つの島（最終ラベル）に統合された（表5、図2）。
【自己への気づき：他者との関係の中で引き継がれる自

己のあり様】

この島は、家族や周囲との関係の中で、自分のあり方や人生が引き継がれ、引き継いでいくように感じているというものであった。

【自己への気づき：自己の経験を通して培われてきた自己の傾向】

この島は、幼い頃からの生活や病気の経験を通して培われてきた自分の傾向や生活のあり方、姿勢に気づき、それに合わせた病気のコントロールを行おうとしているというものであった。

【生活への態度：生活が変化する中での楽しみや喜びの維持】

この島は、時が流れ、生活が変化しても、生活を充実したものにする喜びや楽しみは持ち続けたいと思っているというものであった。

【糖尿病との向き合い方：状況に関係なく主体的に行う生活や身体の調整】

この島は、糖尿病は避けられないので、どんな状況であれ、日頃の生活の中で、自分で目標を持ち、自分なりに身体を捉え、生活調整や身体の整え方を編み出すよう付き合っていこうと考えているというものであった。

【生活の志向：楽しみと身体調整が共存した自然体で充実した生活】

この島は、楽しみと身体を整えることが共存し、自然体で充実した生活を送るのが良いと感じているというものであった。

【将来の見通し：変化に応じ柔軟に対応できる感覚の獲得】

この島は、今までの取り組みを通して、今後も生じてくる変化に合わせて自然にうまくできていくように感じているというものであった。

対象者の反応は、【自己への気づき：他者との関係の中で引き継がれる自己のあり様】と【自己への気づき：自己の経験を通して培われてきた自己の傾向】を軸として、【生活への態度：生活が変化する中での楽しみや喜びの維持】や【糖尿病との向き合い方：状況に関係なく主体的に行う生活や身体の調整】が生じ、【生活の志向：楽しみと身体調整が共存した自然体で充実した生活】や【将来の見通し：変化に応じ柔軟に対応できる感覚の獲得】がもたらされるものであった。

VIII. 考 察

1. 本看護実践モデルの有用性

1) 連続性の維持・拡張

本研究の参加者は自分らしい生活ができていないある

表5 対象者の反応の個別分析結果の最終ラベル

A氏	J001	糖尿病は自分の生活の中で自分の身体をつかみつつ自分の目標を達成するといったすべて自分次第である。
	J002	形作ってきた老後が崩れたりと生活が変化していく中で形を変えながら存在する関わりや喜びの中で人生を作り続けられていると感じている。
	J003	がんじがらめでもなく、楽しみだけでもない、両者が含まれた自然体で充実した生活を志向する。
	I005	数値上昇が不安を伴う関心事項となり、自己の目標や楽しみは2の次の、身体にとって最善の方法を取り入れようとしている。
	H005	今の糖尿病や自分の身体、生活などについての考え方の根底となっている過去の体験を思い出す。
	F008	今後を生活を考える中で、今身体を整えておきたいと考えている。
B氏	K001	身体状態や気持ちなどの変動するものでなく、日々営んでいる生活への意識が高まっている。
	J001	今に至る、母親から子へと流れる流れの中で家族の行く末に思いをはせている。
	J002	自分の今の状態と、当たり前のように満足していた昔の状態との違いが意識に上ってきている。
	J003	自分自身の強みや弱みが、今まで生きてきた中で培われた自分の傾向として捉えられている。
	J005	自分が感覚する身体の反応をもとにして、身体の状態を捉えている。
	I001	身体の状態は、突如として起こってくるといった意識の及ばないところで変化すると感じている。
C氏	H003	治療の効果など自分の身体の内側で起こっていることを、医療者からの説明など医学的な知識の中で捉えようとしている。
	H001	特別に意識を集中していなくても、自然に変化にうまく対応しながら生活できるように感じている。
	H002	自分の経験と関係する他者や社会の流れとが重なりあった中で自分のあり方を考えている。
	H003	自分の経験を通して自分や生活のあり様を捉えている。
	H004	病気をコントロールする取り組みが中途半端でどっちつかずになっているように感じている。
	G002	今後も自分なりに出来ることをしながら糖尿病と付き合い合っていくしかないと感じ始めている。
	G004	先に人生を歩んでいる人の姿や家系の傾向などの先人の道のりを通して自分のあり方や生活を捉えようとしている。
	F003	自分ではなかなか自覚できる要素がない中で数値や周りの人の忠告が自分の状態を知らせるものとなっていると感じている。

いは自分らしさを失われてしまったと感じていたり、将来の見通しが立っていないなど連続性の感覚が縮小している人たちであった。参加当初の参加者は、厳重なコントロールを目指し好きなことを制限し満足感を得られない生活をしていたり、生活調整が中途半端で将来を憂っていたり、将来の身体状態の悪化を懸念したりしていた。しかし、本看護実践の中で、自己の傾向や生活のあり方に気づき、それが過去の経験から培われているものであること、あるいは親の世代から引き継がれ、引き継いでいくものであること（【自己への気づき：他者との関係の中で引き継がれる自己のあり様】【自己への気づ

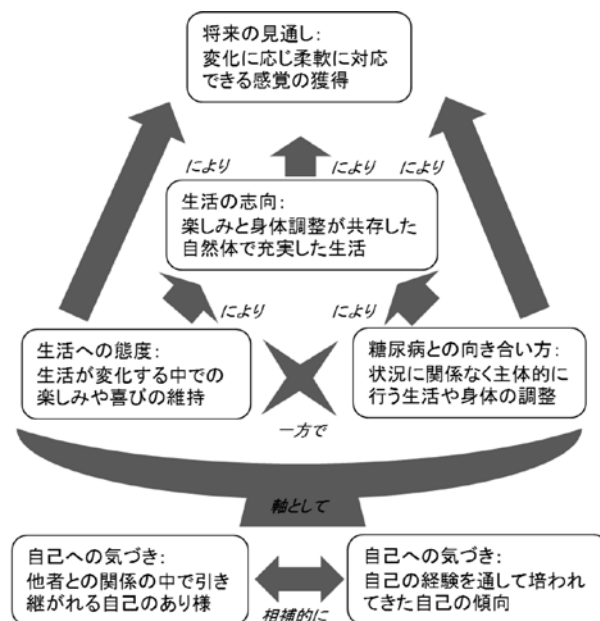


図2 仮説モデルに基づいた看護実践での対象者の反応のシンボルモデル図

き：自己の経験を通して培われてきた自己の傾向】）また、自己の生活を充実させる事柄に気づきそれを大事にしようと思う（【生活への態度：生活が変化する中での楽しみや喜びの維持】）など、過去からつながる自己を感覚し、それを継続していこうとしていた。さらに、実践を経ることで、自分なりにこれからもうまくやっていける（【将来の見通し：変化に応じ柔軟に対応できる感覚の獲得】）という感覚が生み出されていた。先行研究⁶⁾において、2型糖尿病の連続性は、現在・将来の間に不連続があること、自覚症状も少なく生活の変化も劇的でないため途絶の感覚を抱きにくく、それゆえ連続性の動態が本人に意識されにくいことが明らかとなっていたが、本看護実践モデルは、「連続性の動態のアセスメント」「連続性の感覚からの実践の評価」およびそれを患者と「応答・共有」することによって、そのように日常に埋没している連続性を表面に浮かび上がらせ、本人が意識することによって、過去－現在－将来の自己のつながりである連続性の感覚の維持・拡張がもたらされるものであった。

2) 主体的な生活調整

本看護実践モデルで、対象者は、連続性の維持・拡張に留まらず、自分の経験を基に自ら主体的に生活調整の工夫をするなど、生活調整に向かうようになっていた。当初、生活調整は数値に一喜一憂しながら常に自分の行動を振り返り、完璧にできていない自分を責めるという中で行われることが多かった。しかし、それらの生活調整が過去からの経験・生活のあり方や先の見通しとつな

がら中で、今後もうまくやっていけるという感覚をもたらしていた。

このことから、本看護実践モデルは、対象者の連続性の感覚の維持・拡張のみならず、主体的な生活調整を行うことを促進することが示された。

2. 本モデルにおける看護実践

仮説モデルを作成した当初は、看護者が適切に連続性の動態をアセスメント、連続性の感覚からの実践の評価を行うことで、対象者に合った生活調整への支援を導くことが可能となると考えていた。しかしながら、看護実践は【本人の思い・考え・望みを問いかけ明確化する支援】を通して、連続性の動態のアセスメントや連続性の感覚からの評価が深まっていた。この深まりにより、【現状の把握を促す支援】【本人の望む方向に向かって生活調整することを重視する支援】【自身の力を用いて生活調整することを促進する支援】を対象者に合わせて、適切なタイミングで行うことを可能にしていた。また、対象者の方も、そのやりとりによって自己の連続性の動態に気づき、連続性の感覚を実感していた。そのことにより、対象者自身が主体的に生活調整方法を検討することにつながっていた。このように、【本人の思い・考え・望みを問いかけ明確化する支援】は、本看護実践の要になっていた。木村⁷⁾は、自分であるという実感は、私はこういうものであるというようなものとしての自分

ではなく、花が美しいと感じるなどといったこととしての自分、つまり世界に述語的に関わっている自分から生まれると述べている。日々の生活でどのように思い、感じ、考えているかを問いかける【本人の思い・考え・望みを問いかけ明確化する支援】は、述語的に世界に関わる自分を意識化し、自己への気づき、連続性の感覚の維持をもたらすものであると考える。

3. 仮説モデルの修正

本研究結果より、以下の仮説モデルの修正を行い、看護実践モデルを作成した（図3）

・看護者のみならず、患者も連続性の動態を自覚し、連続性の感覚を実感することによって、自ら生活調整方法の検討を行っていることから、患者自身で行っていることもモデルに加えた。

・【本人の思い・考え・望みを問いかけ明確化する支援】は、患者の連続性の動態の自覚、連続性の感覚の実感と、看護者の連続性の動態のアセスメント、連続性の感覚からの実践の評価を共有し、深めることに貢献することでその人にあった生活調整への支援が行えること、また、患者の語りに応答しながらなされることから、『応答・共有』として、新たにモデルに位置づけた。

・看護実践モデルによって患者にもたらされる成果として【連続性の維持・拡張】【主体的な生活調整】を加えた。

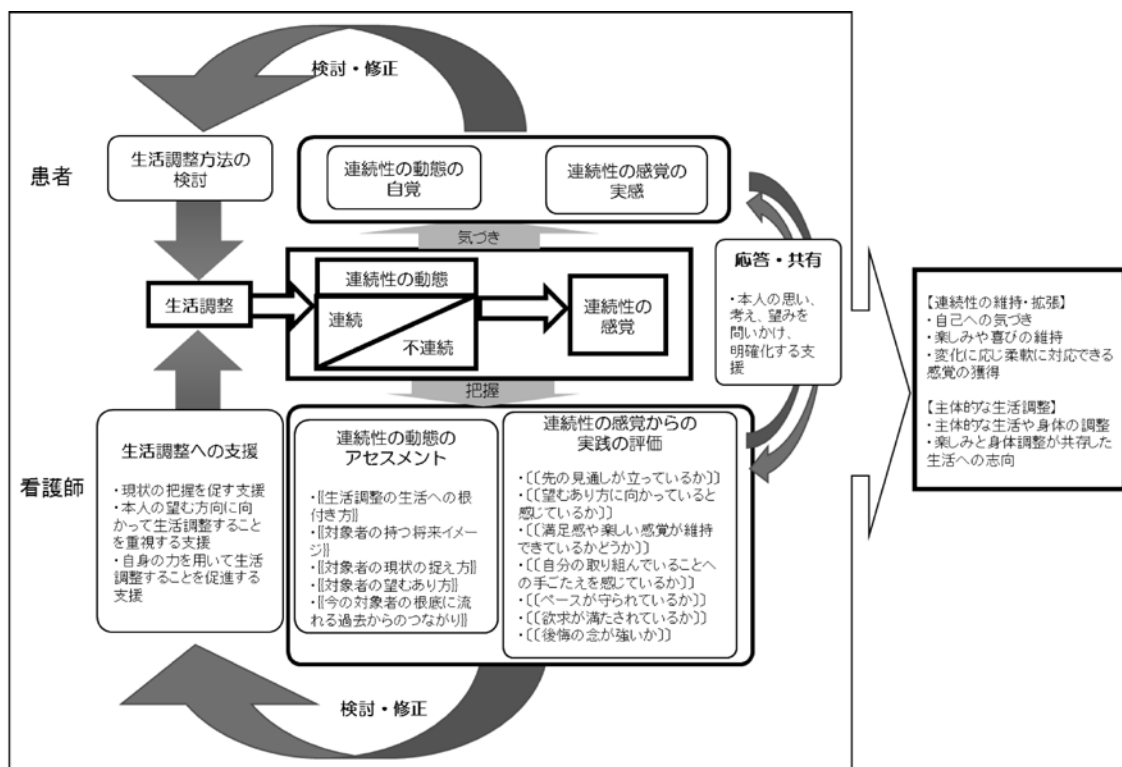


図3 2型糖尿病患者の主体的な生活を支える連続性に着目した看護実践モデル

IX. 本看護実践モデルの意義

本研究では、生活調整という変化の中で自己を保つ視点として連続性の概念を明確化し看護実践モデルを開発した。これは、慢性という特性を踏まえた包括的指標が十分に検討されておらず⁸⁾、糖尿病とともにある生活が自分らしく営めているのかどうかの視点からケアを評価することが困難な現状に、一つの視点を提供することができたと考える。また、既存研究における対象のあり方はフェーズや段階、変遷として変化や差異に視点を当てているのに対し、本研究で明確化した連続性の概念は変化から変化する中のつながりに視点を移すことで、なぜその変化が起こるのかあるいは起こらないのか、あるいはなぜその段階にいるのかを捉えることを可能にする。また、従来の連続性の研究においては、対象の捉える視点と看護実践のあり方は別々に明らかにされてきた中で、本研究はその視点とともに、看護実践モデルとして提示することで、看護実践の場でどのようにそれを見いだし判断しながらその人に合わせて支援を展開していけばいいのかを提示したことは、今後2型糖尿病とともにある人が自分らしさを維持しながら生活調整を支援する看護者が実践を行う際の手引きとなると考える。

X. 本研究の限界および今後の課題

本研究は、研究者が一人で看護実践を行って出された結果である。今後は今回示されたモデル適用の条件をもとに、他の看護者による実践を可能にするプログラムを開発し、本看護実践モデルの有用性を検証していくとともに実行可能性を検証していく必要がある。

また、本研究の分析対象者は、治療法にはバラエティが見られ、連続性の感覚の縮小状態は各々違ったものの、いずれも50～60代女性であったことや合併症を併発

している人がいなかったことから、今後、性別、発達段階、合併症の有無など、状況の違う人に事例に適用し検証していく必要がある。

謝 辞

本研究にご協力くださいました研究対象者の皆様、施設の皆様に謹んで御礼申し上げます。

本論文は、千葉大学大学院看護学研究科における博士学位論文の一部を加筆修正したものである。

本研究における利益相反はない。

引用文献

- 1) Bury. M: Chronic illness as biographical disruption, *Sociology of Health and Illness*, Vol.4, No.2, 167 – 182, 1982.
- 2) Corbin. J. M, Strauss. A. L: *Unending work and Care Managing Chronic Illness at Home*, Jossey-Bass publishers, 1988.
- 3) Becker. G: Continuity After a Stroke: Implications of Life-course Disruption in Old Age, *The Gerontologist*, 33(2): 148 – 158, 1993.
- 4) Whitney. C.M: Maintaining the Square How Older Adults with Parkinson's Disease Sustain Quality in Their Lives, *Journal of Gerontological nursing* 30(1): 28 – 35, 2004.
- 5) Onega. L. L, Tripp-Reimer. T: Expanding the scope of continuity theory application to gerontological nursing, *Journal of Gerontological Nursing*, 23(6): 29 – 35. 1997.
- 6) 河井伸子：2型糖尿病とともにある人の連続性（continuity），*日本糖尿病教育・看護学会誌* 15(2)：128–136, 2011.
- 7) 木村 敏：自分ということ，*ちくま学芸文庫*，p.104–119, 2008.
- 8) 森川浩子：日本における糖尿病自己管理アウトカム指標の開発，平成15・16年度科学研究費補助金（基盤研究（c））研究成果報告書，2005.

DEVELOPMENT OF A NURSING PRACTICE MODEL FOR PEOPLE WITH TYPE 2 DIABETES FOCUSING ON THEIR CONTINUITY

Nobuko Kawai
Osaka University

KEY WORDS :

Type 2 Diabetes, Continuity, Nursing Practice Model

This study is a part of a larger one about the development of a nursing practice model for people with type 2 diabetes, focusing on their continuity of care. The process of development has two phases: (1) drawing up the hypothetical model, and (2) examining the model through application in nursing practice. This paper reports the second phase of the study.

The subjects are three people with type 2 diabetes who receive regular specialty outpatient treatment and have experienced a decreased in continuity of care. The researcher has been in the nursing practice for 10 months. Nursing practice records are reported and qualitatively analyzed to examine usability.

The subjects of this study are aware of their continuity of care from past to future and have developed a forward-looking perspective from receiving the practice model. Also, they began to arrange their lives subjectively. These results show the benefits of the model for the subjects. The hypothetical model has been modified based on this research. The nursing practice model contributes to facilitating living arrangements that support the patients' sense of themselves.